

福祉のひろば

3

2012



ひろばトーク

日本聴覚障害ソーシャルワーカー協会 会長

稲

いな

淳子さん

聴覚障害者のこころのケアと相談支援の課題



編集 総合社会福祉研究所

写真は、陸前高田の一本松

被災者・ 被災地とともに（Ⅳ）

陸前高田市の視察と交流
大槌町保健師全戸家庭訪問健康調査
コミュニティケア型仮設住宅「絆」
自然を生かした復興とまちづくりを

特集

グラビア 陸前高田の一本松で
消防団員 51 名に黙祷

小川恂藏さんは何を残したか（後篇）

住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083

京都市中京区三条柳馬場東入中之町10

代表取締役社長 川下 晃正

TEL (075) 211-7277

FAX (075) 211-7270

http://www.kyoto-archi.co.jp/

〒601-8382

京都市南区吉祥院石原上川原町21

http://www.creates-k.co.jp

クリエイツかもかわ



TEL 075 (661) 5741

FAX 075 (693) 6605

価格税込・送料何冊でも240円

●自閉症児の子育てと教育のヒント満載！

読みとけば
見えてくる
自閉症児の心と発達



熊本勝重 ● 著 越野和之・大阪教育文化センター ● 編

「人間関係」「言葉」「安心感」をキーワードに、「できない」「わからない」のは、そもそも揺れ動く自閉症の心と発達、教育と子育てを考える。読めば自閉症児の見え方が変わる。 定価2100円

よくわかる
子どものもの
栗原まな ◆ 著

高次脳機能障害

高次脳機能障害の
症状・検査・対応法がわかりやすい！



ことが出てこない、覚えられない……わたしは何の病気の？
目に見えにくく、わかりにくい高次脳機能障害。なかでも子どもの
障害をやさしく解説。長年リハビリテーションに携わる小児科
医が、その豊富な臨床に基づき、家族・本人・支える人たちの「な
に？なぜ？どうすればいい？」に答えます。

巻頭12頁★子どもも読める事例(総ルビ) 定価1470円

ふたたび楽しく
生きていくためのメッセージ

改訂増補版

高次脳機能障害の
子どもをもつ家族への対話
栗原まな・アトムのお ◆ 編著
定価1785円

陸前高田の一本松で 消防団員51名に黙祷

「私は、忠実に日本国憲法及び法律を擁護し、命令、条例及び規則を遵守し、不公平並びに偏見を避け、何人をも恐れず良心に従って忠実に消防の義務を遂行することを厳粛に誓います。」

陸前高田市消防団の宣誓書です。岩手県で約二五〇人、陸前高田市で五一人の消防団員が津波の犠牲になりました。

第一六回合宿研究会（一月七（九日）二日めの陸前高田市視察で案内してくださった伊藤勇一さんが、「私の先輩や二〇代、三〇代の若者も命を失いました。非常に残念です。トランペットを吹いて追悼したい」と参加者に呼びかけました。





朝早く、遠野市の会場を観光バスで出発。途中、遠野市の応急仮設住宅「絆」を横に見て、陸前高田市へ。川の駅「よこた」で伊藤さん(左)と打ち合わせ、その後、広田半島の中腹にあるオートキャンプ場「モビリア」の応急仮設住宅へ。避難してそこに入居されている千葉さん(右)が、バスの中で被災後の生活や仕事、仮設住宅での生活などについて話をしてくださいました。



市内の視察後に、横田地域のコミュニティセンターで、被災の状況、市の復興計画、住民の思いなどを、伊藤さん、菅野悦雄さんかんのえつお（陸前高田市水産課長）、大坪涼子さん（市会議員）から伺いました。生々しい報告に、参加者は共感と胸いっぱい思いを抱えて聞き入りました。



それぞれに思いを重ねて参加した今回の研究会。現地からの報告では、共通して全国の支援に対する感謝や命が繋がった者としての使命が語られました。憲法を基軸にした復旧を、実際の現地に立って、現地の方々の思いとして、運動として、卵を抱くように……。被災地の1年は、簡単には言葉に表せません。しかし伝えていかなければなりません。研究会に参加されたみなさんが、体感したこと、体験したことを広げてくださることを願っています。
(写真上は、モビリアの展望台から広田湾、そして陸前高田市街地を臨む。写真下は、コミュニティセンターで報告者とともに記念撮影をしました。写真・文 下野祇園)

●特集● 被災者・被災地とともに (Ⅳ)
——第16回合宿研究会から

陸前高田市の視察と地元関係者との交流	10
大槌町 保健師全戸家庭訪問健康調査活動から見えたこと	鈴木るり子 23
遠野市 コミュニティケア型仮設住宅 希望の郷「絆」	富安 亮輔 27
久慈市 自然を生かした復興とまちづくりを	城内 仲悦 31
権利の実現をめざして—小川政亮・鍋谷州春対談	33
感想とまとめ 小野正夫・牧岡英夫・内藤智子・末永睦子	34

●トピックス●

座談会 小川恂藏さんは何を残したか (後篇)	39
小川 政亮・横湯 園子・永岡 正己	

●連載●

フォーラム

保育運動の夢の砦「保育プラザJAPAN」ができた!

上野さと子 50

ひとつのこと—社会福祉労働と私たちの実践

高齢視覚障害者援助の専門性とは? 槻 ノ 木 荘 52

相談室の窓から

大学進学後のひきこもり 青木 道忠 54

わらじ医者 早川一光の「よろず診療所日誌」

不思議、ふしぎ、人間のつくり (その3) 早川 一光 56

よりあって おりあって—宅老所よりあい物語—

生活のなかでおくる 下村恵美子 58

育つ風景 福島からの報告 その3

清水 玲子 60

野口雨情—名作の底に流れるもの—

第12回 (最終回) 『人買船』 奈良 達雄 62

映画案内 『恍惚の人』

吉村 英夫 64

現代の貧困を訪ねて

「西成を変えることが大阪を変える」 生田 武志 66

地球へ途中下車

第7回 砂漠に暮らす人々—モロッコ 根津 眞澄 68

私の研究ノート 高齢者の社会的孤立

湯川 順子 70

ホームレスから日本を見れば

ありむら潜 72

地域から現場から 中国残留邦人への医療支援

小澤 直美 73

花咲け! 男やもめ

川口モトコ 74

●表紙の絵と写真●

絵=神門やす子

写真=陸前高田の一本松

(下野祇園)



●カット●

川本 浩

聴覚障害者のこころのケアと 相談支援の課題

日本聴覚障害ソーシャルワーカー協会 会長 ^{いな}稲 ^{じゅんこ}淳子さん

テレビ画面に手話通訳者を見かけることが増えてきたように、聴覚障害者のコミュニケーションへの理解がひろまっています。その半面、仕事、家庭、教育などで人間関係に悩む聴覚障害者が増えています。一般には筆談や手話通訳で解決できると思われるがちですが、これだけでコミュニケーションは成り立ちません。

聴覚障害者にも一人ひとりに個性や能力があり、生育環境も違います。しかし、社会では「聞こえないから無理だ」「仕事をまかせられない」と、能力が低いと決めつけられたり、いつまでも低い給与で働かされる人もいます。聴覚障害者も、ハンデがあるから健聴者の何倍も努力しなければならぬ、という教育を受け、自分の心を抑えて生きていく人が多くなります。

「疲れた」という言葉さえ「甘え」と受け取られてしまう社会の中で、聴覚障害者を理解し支える社会資源がどのくらいあるのかという疑問から、聴覚障害者による聴覚障害者の支援が必要ではないかと考えました。今までの行政や支援機関の支援は、手話通訳をつけてコミュニケーションの保障を図る、情報提供をする、というものがほとんどです。

その中で私は、大阪労働局から「精神障害者雇用トータルサポーター」として委嘱を受けて、ハローワークで聴覚障害者の相談に乗っています。たとえば、会社から「指示に従わない」「無断欠勤した」などの相談や、働く当人からも「いじめられた」「出勤できない」など、筆談や手話通訳で解決できない相談がきます。私は、「情報はすべて視覚で判断するしかないという不安を毎日抱えている」「筆談にも読解力などの個人差がある」「言語の獲得に限界があり、意味が伝わらず誤解される」「聴覚障害ゆえに、健聴者には当たり前常識やマナーなどが身につけられない」など、聴覚障害の特性を職場や関係者に説明します。職場定着支援で会社訪問して理解を求めたり、周辺環境の整理やアドバイスなども



いな じゅんこ

ホームヘルパー、精神保健福祉士、社会福祉士。大阪ろうあ会館居宅介護支援・訪問介護事業に従事したり、大阪・兵庫・京都で聴覚障害者のための相談活動を行う。2008年に大阪労働局から「精神障害者就職サポーター」(11年に「精神障害者雇用トータルサポーター」と改称)を委嘱され、ハローワークに配属。2010年から日本聴覚障害ソーシャルワーカー協会会長。

します。当人には、安心して話せるように、また、自分の心を言語化することが困難な時はその人に合わせたコミュニケーションで、一緒に考えていきます。精神科などの受診を勧めたり、会社や家族との話し合いに結びつけたりするなど、聴覚障害者自身が社会参加するために必要な橋渡しをします。

聴覚障害者が健聴者に合わせて自分を抑えることで精神のバランスを崩したり、転職を繰り返して心が傷つき人間不信になったり、自殺願望を抱くこともめずらしくありません。職場での問題が実は当人の生活問題に絡むこともあり、就労支援だけでなく生活支援が必要な場合があります。しかし、聴覚障害の特性を理解した支援機関が少なく、生活支援に結びつけられないことがあります。

聴覚障害者の支援には、直接的なコミュニケーション手段を用い、聴覚障害の特性を把握し理解する、社会福祉の専門支援の資格をもつ支援者が必要です。そこで二〇〇六年に「日本聴覚障害ソーシャルワーカー協会」を設立しました。聴覚障害をもつソーシャルワーカーも約二〇名、所属しています。社会福祉士、精神保健福祉士の社会福祉専門職団体として、聴覚障害者支援に関わるソーシャルワーカーの資質の向上を図るとともに、普及・啓発等の事業を行い、聴覚障害者の社会的地位向上と福祉のための専門的・社会的活動を進めることにより、聴覚障害者の福祉に関する理解の増進に寄与することを目的としています。

また、東日本大震災聴覚障害者救援中央本部*の救援協力団体として、現地調査を行い、長期・継続的支援の見地から、日本財団の助成を受けて「聴覚サポーターなかま」相談支援事業を実施しています。活動はホームページ <http://www.jaswdh.org/> をご覧下さい。

*全日本ろうあ連盟、日本手話通訳士協会、全国手話通訳問題研究会で構成し、義援金・物資支援・被災地への手話通訳者派遣調整など被災地に関わる支援を担う。現在、一五団体が協力している。

特集

被災者・被災地とともに (IV)

今号は、総合社会福祉研究所が一月七日～九日に岩手県遠野市で開催した第一六回合宿研究会「被災地とともに——被災地で何が問われているか——」の取り組みを紹介します。

例年、次回の社会福祉研究交流集会の開催予定地で、冬の合宿研究会を行ってきました。今回の研究会では、初日に岩手県大槌町保健師全戸家庭訪問健康調査から問われたこと（鈴木るり子さん）、応急仮設住宅の開設・運営に関わって（富安亮輔さん）、被災地のまちづくり（城内仲悦さん）の実践・研究報告、二日めは陸前高田市の視察（応急仮設住宅見学と居住者の話、仮設知的障害者グループホーム、市街地、一本松展望台の視察、被災状況と現況等について地元の菅野悦雄さん、大坪涼子さん、伊藤勇一さんらから報告を伺い、交流）、最終日には小川政亮さん（日本社会事業大学名誉教授）と鍋谷春春さん（日本福祉大学客員教授・総合社会福祉研究所主任研究員）の対談を行いました。今年の社会福祉研究交流集会は福島県で開催する予定です。